ブドウ「高尾」の早期成園化・安定生産に向けた栽培技術の確立

【背景と目的】

特産品種「高尾」を中心に栽培されている東京のブドウ生産では、高樹齢化などの影響で樹勢が低下し、生産量の低下や着色不良果の発生などが問題になっている。このような問題を解決するため、「高尾」の根域制限栽培やコンパクトな樹形の栽培技術開発を行い、早期成園化および省力的で高品質な安定生産技術について検討する。また、生産者から「高尾」の優良系統の選抜が求められているため、生産者組織と共同で評価・選抜を行い、東京オリジナル品種としての維持・強化を図る。

【研究概要】

１．新たな栽培方式の検討

（１）早期成園化の評価：成長に併せて根域を拡大する根域制限（以下　拡大）と拡大しない根域制限（以下　根圏）では定植４年目からどちらも成木並みの着果量である1,500kg/10ａ程度となった。Ｌ房率・健全果が比較的多かったのは、拡大と短梢剪定の組み合わせ栽培であった。

（２）安定生産技術の確立：全ての根域制限栽培で充分量な新梢と花芽が確保できたが、特に拡大で多かった。果実品質については、房重・１粒重・果皮色・糖度など総合的に高品質だったのは拡大と短梢剪定の組み合わせであった。短梢剪定における結果母枝の芽数は、２芽で基部からの長果枝発生が多いことから、より樹形維持に適するのは２芽剪定である。

（３）経営評価：拡大と根圏を比較すると、累積作業時間および単年度あたりの作業時間は拡大で少ない。定植５年目における累積想定販売額は、拡大と短梢の組み合わせで導入コストを200万円程度超え、作業時間あたりの販売額は5,000円程度と最も高かった。

２．優良系統の選抜

選抜した3つの優良系統間に開花期や収穫期に差は無く、果皮色は１・２号が黒色に近く、一粒重は３号が重い。稲城市高尾ぶどう生産組合と協議し、それぞれの特徴を活用すべく３系統とも選抜した。